

人口問題と私たちが直面する課題 6



1. 近代的規範が合理的で伝統的規範が合理的ではないの？

前号で、「出生が行為であること」、そしてその「行為は意識されている価値観だけで成立するものではなく、むしろ意識していない価値観に支配されている部分が多いこと」、「出生が行為である以上、その社会的価値観を反映させたものとなること」をご説明しました。そこで読者の方から、近代や現代が合理的で前近代が非合理的というのは、短絡過ぎないかというご叱正をいただきました。

これはまったくご指摘の通りで、特に近代や現代が合理的と言いたかったわけではありません。ただ、近代や現代の特徴として、「計算可能性という合理性」に従って人々が行為するということは言えると思います。しかしここで注意しなければならないのは、「計算可能性とは計算できるものにしかな適用できない」ということです。

現代における少子化のことを考えるためにも、現代の「合理的判断」について少し考えて見ましょう。数年前のハヤブサの快挙を覚えている人も多いと思います。日本の人工衛星ハヤブサが火星と

木星の間の小惑星帯にまで到達し、小惑星「イトカワ」に着陸し、さらに地球まで帰還しました。この距離を見てわかるように、日本の航空宇宙工学は信じられないほどの高い技術を示しました。

このハヤブサの快挙は、実はそのほとんどがニュートン力学で説明ができます。アインシュタインの相対性理論に基づく重力や飛行速度の変化による時間の進む速さの変化まで計算に入れなければ、この快挙は達成できなかったと思いますが、そのほとんどの部分はニュートン力学に基づく計算によるもので、そこにアインシュタインの理論による若干の補正をして飛行計画は作られていると考えられます。

素人が大雑把に言えば、ハヤブサの快挙は、ソーセージをポーンと上空に放り投げて、それをつかんだのと同じ方程式で達成されたということです。宇宙空間にほとんど何もないことを前提に考えれば、これほど広大な空間や、猛烈な速度を扱うものであっても計算可能なのです。

しかし、ソーセージをポーンと放り投げたときに、トンビか何か飛んできて、ソーセージを奪っていけば、ソーセージは手元に戻りません。ハヤブサも同じように、途中で把握できていない小惑星や宇宙塵と接触でもしたら、あの快挙は達成できなかったのです。

宇宙空間という、物理法則で把握されている法則以外の条件が非常に限定されている状況でその計算は成り立ちました。しかし、現実の人間社会は、真空中の物理法則ほど解明されていません。そして私たちは「わかっている範囲しかわかりません」し、場合によっては「わかりたいようにしか、わかっていない」のです。

その意味では近・現代が合理的といっても、本当に合理的なのか、実はよくわからないというのが真実だと思います。明治の文明開化の頃、村の鎮守の神社を開けてご神体を取り出し、ただの石ではないか、こんなものを拝んでいたのかと、これまでの伝統的な価値観を破壊するような動きがあったと言います。

また「この木を切ると祟りがある」という言い伝えがある森を、材木という貨幣価値だけに換算して近代的合理主義者が切り開くということなども多くありました。その結果、実はその地域は環境的に脆弱な地域で、森を伐採することで土石流に村が飲み込まれるということがあり得たのです。

それを「環境的に脆弱だから」と説明して保護するのと、「祟りがある」として触らないのとどちらが適切か、時代を考えればわからないと思います。少なくとも、説明があまり要らないという意味では「祟りがある」とした方が簡単だったのかもしれませんが。よって、「妥当性」という考え方からはどちらも同じと言えるかもしれません。

この考え方から言えば、実は現代の合理性も価値観としての合理性であって、しかもわかっている範囲内の条件だけを見た合理性であり、本当に合理的かどうかは別問題であるということができません。つまり伝統的社会であっても、近代合理的社会であっても、その行為の基準となる価値観のほとんどは人々に前提として共有されており、意識されているものではないのです。そしてその価値観がどの基準で合理的となるのかは、時代や環境によって変わってきます。

伝統的な生活を潤滑に行うためには、伝統的な価値観に基づく行為の方が妥当性があったのでしょう。また現代人は、計算可能性によって一見合理的に行動しているようですが、その条件から離れたものの合理性が見えないために、環境問題をはじめとする多くの困難な問題を引き起こしているのです。その意味で、現代が合理的というのは括弧付きの合理性だということを忘れてはならないと思います。

ただ人口問題に話を戻すと、現代に適応しないにもかかわらず、伝統的な価値観のまま高出生を維持している人たちの価値観を変えていくためには、たとえ「括弧付き」であっても、近代合理的な価値観の導入が必要になります。そのためには、識字率の向上や就学率の向上、特にその変化に遅れがちな女性のそれが不可欠になります。そしてそこで可能になった変化を具体的な結果に結びつけるためには、女性の地位の向上や選択権の向上が不可欠になるのです。

2. 人口問題は増加を抑制する問題なのかそれとも少子化を改善する課題なのか

やっと答えにきましたね。この問題に解答する前に、これまでの議論を簡単にまとめましょう。

人口が地球の扶養力の限界を超えて増加すれば、この地球という惑星の限界に直面し、環境は破壊され、人類の歴史に見るとおり、文明崩壊・戦争・飢餓などの手段で人口圧を下げるしかなくなります。このような究極的な悲劇を避けるためには、人口の安定化が絶対に不可欠です。この人口の安定化を、文明崩壊・戦争・飢餓などの非人道的な方法で行わず、人道的な方法で行うとすれば、多産多死から多産少死、少産少死の過程である人口転換を経るしかありません。

そしてその過程で、経済活動年齢人口が多い人口ボーナス期を通るのですが、その後、どうしても高齢人口が多く、年少人口が少ない高齢社会を経験し、人口オーナス（負担）といわれる状態を通らざるを得ません。この問題を、かつてのように人口を爆発的に増やすことで解決することはできませんから、一つは健康長寿を実現し、あらゆる世代の社会参画を活性化することでこれまでの価値観を変え、高齢社会でありながら、経済的に活力のある社会を構築するしかないのです。

そしてもう一つ、現代日本のような極端な少子社会は、実は子どもを持ちたい人が持てなくなっている社会であるといえます。これも過去の社会的価値観からのさまざまな変化を必要としますが、子どもを持ちたい人が持てるような社会制度を構築する必要があります。

ここまでお付き合いいただければ、最初に立てた疑問「人口問題は増加を抑制する問題なのか、それとも少子化を改善する課題なのか」についての回答は、明確だと思います。急増も急減も大きな社会的負担を伴います。従って、人口問題への対処とは、急増や急減を避け、安定化を志向する活動だといえると思います。

ここで原則を確認する必要があります。子どもを作る・作らないという選択は一人ひとりにとって重要な選択であり、人生を大きく左右する選択です。従って、政府であれ国際機関であれ、どうしろと命令することはできません。そのような中で経験則として、社会環境が整い、女性が望まない妊娠を避けることができさえすれば、出生は置き換え水準程度になってくということが分かっています。また統計的にも、望まない妊娠を防ぐことさえできたら、世界人口は急速に安定化に向かうということが分かっています。

さらに先進国の少子化についても同様です。子どもを持ちたい人が持てるようにすることが重要です。その場合でも、現在の状況では合計特殊出生率（TFR）が置き換え水準を超えるような事態になるとは考えにくいと思います。つまり人口問題に対する対応とは、「子どもを持ちたくない人が望まない妊娠を避けることができるようにすること」、さらに「子どもを持ちたい人が持てるようにすること」である、というのが回答になると思います。このどちらも一人ひとりの意思を尊重し、一人ひとりの希望を達成するための、そしてすべての人が幸せに暮らしていくための活動であると考えています。

一言で言うと「人口問題とは幸せを作るための活動である」と覚えていただきたいと思います。そしてすべての人が幸せに生活するための基盤となる人口問題に関する活動に携わることは、私たちにとっても幸せなことであると思っています。